

# 近代沖縄新聞集成

DVD版

●編集 『近代沖縄新聞集成DVD版』刊行委員会  
刊行委員長 新崎盛暉（沖縄大学名誉教授）

●刊行 2010年11月～2013年6月  
●配本 全6回配本  
●抽定価 本体抽価570,000円＋税  
●推薦 有山輝雄、仲程昌徳、三木健、宮城晴美  
●原本提供 国立国会図書館・國學院大學・琉球新報社・財団法人沖縄県文化振興会 史料編集室・沖縄県立図書館・南西マイクロ・株式会社ニチマイ・その他

第1回配本

## 『琉球新報』DVD版 『1898年～1908年』

●原発行所 琉球新報社  
●収録内容 第792号（1898年4月1日）～第3,119号（1908年12月31日）  
●学名/口訳 琉球新報社

●体裁 DVD2枚・検索システムインストールCD1枚・別冊1  
●別冊 収録新聞発行年月日・号数一覧（分売不可）  
●定価 本体抽価95,000円＋税  
●発売 2010年11月

第1・2回配本に収録する『琉球新報』は、戦火をくぐり抜けて国立国会図書館に遺されていた。総5,659号、23、142枚の新聞紙面、19世紀末から20世紀初頭にかけての20年間の沖縄の日々を、DVD版で再現！

### 近代沖縄新聞集成 ● DVD版 配本・刊行概要一覧

配本	タイトル/収録新聞発行年/収録号数	刊行概要
第1回配本	琉球新報DVD版 [1898年～1908年] 第792号～第3,119号	検索システムインストールCD1枚（第1回～第2回配本 共用） DVD2枚・別冊1（第1回～第2回配本 共用） 刊行年月＝2010年11月/定価＝本体抽価95,000円＋税 ISBN978-4-8350-6812-1
第2回配本	琉球新報DVD版 [1909年～1918年] 第3,120号～第6,450号	DVD2枚 刊行年月＝2011年1月/定価＝本体抽価95,000円＋税 ISBN978-4-8350-6815-2
第3回配本	沖縄毎日新聞DVD版 [1909年～1914年] 第73号～第2,135号	検索システムはDVDに内蔵 DVD2枚・別冊1 刊行年月＝2011年11月/定価＝本体抽価95,000円＋税 ISBN978-4-8350-6817-6
第4回配本	琉球新報DVD版 [1936年～1940年] 第12,818号～14,241号 （*1936年分は2号分のみ収録。1937年分は欠号）	検索システムインストールCD1枚 DVD2枚・別冊1 刊行年月＝2012年6月/定価＝本体抽価95,000円＋税 ISBN978-4-8350-6820-6
第5回配本	沖縄日報DVD版 [1936年～1940年] 第1,687号～3,119号 （*1936年分は3号分のみ収録。1937年分は欠号）	検索システムインストールCD1枚 DVD2枚・別冊1 刊行年月＝2012年11月/定価＝本体抽価95,000円＋税 ISBN978-4-8350-6823-7
第6回配本	沖縄新聞・沖縄朝日新聞・沖縄タイムス・沖縄新報・その他新聞	DVD2枚・別冊1 刊行年月＝2013年6月/定価＝本体抽価95,000円＋税 ISBN978-4-8350-6826-8

●表示価格はすべて税別。

発売＝不二出版販売

T113・0023  
東京都文京区向丘1-2-12  
電話03・3812・4433  
フアクミ/03・3812・4464  
振替001403・586087

沖縄戦は、県内で発行されていた新聞の殆どすべてを焼き払った。当刊行委員会では、戦前までに沖縄で発行され、半世紀に及ぶ調査によって県内外から掘り起こされた全新聞を、沖縄・日本近代史の資料として、DVDにて提供する。

# 近代沖縄新聞集成

DVD版

発売＝不二出版販売

第1回配本

## 琉球新報

DVD版

『1898年～1908年』

編集 ●『近代沖縄新聞集成DVD版』刊行委員会

刊行委員長 ●新崎盛暉（沖縄大学名誉教授）

第1回配本 ●本体抽価95,000円＋税





# 刊行にあたって

私が大学に入学したばかりのころ、「政治学」の講義の冒頭で、当時活発な言論活動で知られていた辻清明教授が、「新聞があれば、政治は学べる」と述べた。このことは、沖縄の現状をどのように分析し、どう伝えていくべきかについての手がかりを求めていた私を勇気づけた。私が大学に入る前年、すなわち一九五五年一月、朝日新聞が「沖縄の米民政を衝く」という特集記事を掲載していた。戦後十年にして、全国紙がはじめて大々的に沖縄の現状を伝えたいいわゆる「朝日報道」である。そしてこの年、五六年六月、多くの全国紙が、競って沖縄における「島ぐるみ闘争」の爆発について報じた。それ以来約半世紀、私の沖縄現代史に関する記述の多くを支えたのが、膨大な新聞のスクラップであった。

同じことは、沖縄近代史についてもいえるだろう。大田昌秀氏は、「沖縄の民衆意識」(弘文堂新社、一九六七年)の「まえがき」で「沖縄の新聞を明治二六年の創刊から大正初期にいたるまで一枚一枚めくることがよって、歴史書や他の文献からは容易に汲みとることのできない、先人たちの血の通ったいわば「生の歩み」を跡づけえたように思う」と書いている。

だが、沖縄戦は、戦前沖縄で発行されていた新聞のほとんどすべてを文字通り焼き払った。このため、多くの個人や組織が、長い時間をかけて、これらの新聞の所在を調査し、収集する努力を続けた。戦後六五年たった今年(二〇一〇年)の夏にも、京都大学総合博物館の地下倉庫で、古い植物標本を包む新聞紙の中から、戦前の沖縄の新聞を発見しようと努力する当山昌直氏たちの活動が報道されている(朝日新聞、二〇一〇年八月二六日)。それでも、国会図書館や國學院大學に比較的まとまって残されていたものを除いて、県内外で所在が確認された新聞は、約七〇〇日分だという。現在では、これらの新聞のコピーは、沖縄県立図書館等で見ることができ、今回の企画は、これらの新聞を、検索機能を付したDVD版として刊行しようというものである。

この企画によって、日本近代史と不可分の関係にありながら、決して日本近代史の中に埋没させることのできない独自性を持つ沖縄近代史の内実を反映する新聞資料が多くの研究者に共有されることを願っている。

『近代沖縄新聞集成DVD版』刊行委員会  
委員長・沖縄大学名誉教授 新崎盛暉

記事変更

号数 1510号  
日付 1902年 4月 9日

前号 次号

紙面ページ 1

前ページ 次ページ

記事見出し登録

1:	分類/項目	
2:	分類/項目	
3:	分類/項目	
4:	分類/項目	
5:	分類/項目	
6:	分類/項目	
7:	分類/項目	
8:	分類/項目	
9:	分類/項目	
10:	分類/項目	
11:	分類/項目	
12:	分類/項目	
13:	分類/項目	
14:	分類/項目	
15:	分類/項目	

登録

拡大 縮小

印刷

検索画面へ戻る

記事変更

号数 1510号  
日付 1902年 4月 9日

前号 次号

紙面ページ 1

前ページ 次ページ

記事見出し登録

1:	分類/項目	
2:	分類/項目	
3:	分類/項目	
4:	分類/項目	
5:	分類/項目	
6:	分類/項目	
7:	分類/項目	
8:	分類/項目	
9:	分類/項目	
10:	分類/項目	
11:	分類/項目	
12:	分類/項目	
13:	分類/項目	
14:	分類/項目	
15:	分類/項目	

登録

拡大 縮小

印刷

検索画面へ戻る

## 閲覧画面の操作について

- ▶画面右の表示ボタンをクリックすれば当該頁から次頁、前頁、次号、前号へ移動が可能になります。
- ▶すべての画像は、拡大縮小表示及び印刷が可能です。
- ▶右中央の「記事見出し登録」の画面は、表示されている「新聞記事」の見出しを、書き込み登録するために付加しました。

◎編集『近代沖縄新聞集成DVD版』刊行委員会  
◎刊行委員

新崎盛暉(委員長・沖縄大学理事長・名誉教授)  
有山輝雄(東京経済大学教授)  
榮野川敦(うるま市教育委員会文化課)  
浦田義和(佐賀大学教授)  
我部政男(山梨学院大学名誉教授)  
高嶺朝一(前琉球新報社社長)  
田名真之(沖縄国際大学教授)  
当山昌直(財団法人沖縄県文化振興会 史料編集室室長)  
仲程昌徳(前琉球大学教授)  
中村誠司(名桜大学教授)  
平敷兼哉(沖縄県地域史協議会代表)  
三木 健(ジャーナリスト、沖縄・八重山文化研究会会長)  
三島わか(沖縄県立芸術大学講師)  
宮城晴美(大学非常勤講師・沖縄女性史)

## 戦前期沖縄関係新聞略年表

1893年(明治26)	9月	『琉球新報』創刊(1940年12月統合廃刊)
1905年(明治38)	11月	『沖縄新聞』創刊(1914年3月廃刊)
1906年(明治39)	4月	『琉球新報』日刊となる
1908年(明治41)	8月	『琉球新報』はじめて写真を掲載
1914年(大正3)	12月	『沖縄毎日新聞』創刊
1914年(大正3)		『沖縄実業時報』創刊
1915年(大正4)	1月	『南国日報』創刊
1917年(大正6)	4月	『先鳴新聞(八重山)』創刊
1919年(大正8)	9月	『沖繩朝日新聞』発売禁止
1920年(大正9)	6月	『沖繩時事新報』創刊
1921年(大正10)	11月	『沖繩日々新聞』創刊
1921年(大正10)	11月	『沖繩日報』発刊
1923年(大正12)	12月	『宮古時報』創刊
1924年(大正13)	7月	『沖繩毎日新聞』創刊(『沖繩日日新聞』と改題)
1927年(昭和2)	11月	『宮古民友新聞』創刊(『宮古時報』を継承)
1929年(昭和4)	1月	『沖繩時事新報』、『沖繩タイムス』と改題
1930年(昭和5)	8月	『八重山新報』創刊
1931年(昭和6)	4月	『沖繩毎日新聞』認可
1932年(昭和7)	11月	『沖繩ウイクリー』創刊(約1年で廃刊)
1933年(昭和8)	6月	『沖繩民衆新聞』創刊(現存未詳)
1934年(昭和9)	9月	『大阪朝日新聞附録九州朝日』熊本鹿見島沖繩版』発行(以後紙名変更あり)
1935年(昭和10)	7月	『沖繩タイムス』、『沖繩昭和新聞』に改題
1937年(昭和12)	4月	『沖繩日日新聞』創刊
1940年(昭和15)	12月	『沖繩日日新聞』創刊(1940年12月統合廃刊)
1941年(昭和16)	2月	『宮古朝日新聞』創刊



# メディア史研究を見直させる近代沖縄の新聞

有山輝雄（東京経済大学教授）

メディア史研究の陥りやすい弊害は、中央の最新のメディア動向に専ら眼を向けて、そこで起きた事象を並べ立てて、メディアの発達を語ることにある。実はそれはきわめて偏向した見方であるが、なかなかそれに気がつかない。まったく異なる視点にたてば、中央の最新の動向もまったく違って見えてくるし、辺境の遅れた事象だと思われがちな動向に豊かな可能性を見出すこともできる。

近代沖縄の新聞は、メディアの歴史全体を考え直すうえでもきわめて重要な視点を提供してくれるはずである。しかし、それは沖縄の新聞が特殊な道歩んできたということではない。寧ろ、大正期の『琉球新報』紙面を見る限り、社説、地元ニュース、東京電報、北京電報、欧州電報、小説、広



告といった構成要素やレイアウトなどは同時期の他の地方新聞紙面とさほど違いはない。だが、それら記事が取りあげているテーマや記事文体などはかなりの独自性をもっている。こうした共通性と独自性の絡み合いこそ沖縄の新聞の個性をつくり、メディアと地域社会の関係を考える契機をあたえている。

残念なことに多くの沖縄の新聞は戦火に焼かれ、わずかしが残っていないことが研究の障害となっていた。今回、国立国会図書館、國學院大學に所蔵されている新聞原紙がDVD版化されることは研究を大きく前進させ深化させることは間違いない。新たな発見や刺激の問題提起が生まれることを期待してやまない。

## 文芸史研究の基本資料

仲程昌徳（元琉球大学教授）

明治四十二年は、「琉球文芸の復興第一年」だと揚言したのは、伊波月城である。その言は、これまで抑圧されていた琉歌大会が開かれ、錚々たる詠み手が会場に居並んだ姿を見て発されたものであった。

その後、盛んに琉歌大会が開催されていく。その様子を見ると、月城の指摘がいかに的確であったかがわかるが、それは琉歌界だけに限ったことではなかった。俳句、短歌、漢詩が結社を中心に盛んに発表され、新体詩があらわれ、沖縄の文芸界は、華やかさを増し、まさしく「文芸復興」といった趣を強くしていく。

そのような明治期の文界の様子が手に取るようにわかるのは、新聞による。沖縄で刊行されていた刊行物は、地上戦でことごとく焼失してしまう。



明治・大正・昭和戦前期の沖縄の様子を知る上で、唯一残されたものといえば、新聞であった。他の研究の場合も似たようなものだろうが、沖縄近代の文芸史研究も、新聞を抜きにしては考えられない。

沖縄で発刊されていた明治から大正中中期にかけての新聞は、国会図書館に所蔵されているコピー版が図書館等に行き渡っていて、割と容易に見ることができ。しかし、大正中期以降昭和戦前期の新聞は国会図書館にもなく、ごくたまに新発見といった格好であられるだけで、一カ所でまとめて見ることはできなかった。それだけに、同時期の研究は、手薄にならざるを得なかったが、「DVD版」の登場で、文芸関係のみならず、他の分野の研究もいよいよ厚みを増していくはずである。



## 時代の要請に応える画期的企画

三木 健（ジャーナリスト・石垣市史編集委員長）

新聞は歴史の一級史料である。私たちは過去の新聞で、当時の人たちの生活や考えを知ることができる。特に沖縄の新聞は、明治国家による琉球処分で天皇制国家体制に組み込まれて以降の、民衆の苦悩を最もよく表出したものと言える。中央からの皇民化・同化政策の中で、沖縄民衆はどう対応してきたのか。それを知りうるのは、やはり新聞を置いてはならない。つぎの新聞週間の標語に「新聞は歴史の秒針である」というのがあったが、まさに「秒単位」で私たちの歴史を知ることができるのだ。

ところが、先の沖縄戦で県内の新聞は灰塵に帰し、ほとんど残らなかった。このことは、私たちが自らの過去の歴史を知る手段さえ、戦争で抹殺されたことを意味する。かろうじて国立国会図書館や國學院大學に所蔵

されている原紙のコピーで、間に合わせてきた経緯がある。これによって沖縄県史をはじめ、多くの市町村史が編まれたが、それが身近にあれば、もっと早く対応できたはずである。

今回、企画・発売される『近代沖縄新聞集成DVD版』は、なんとその現物がパソコン上で活用できるのである。まさに時代の要請に沿う画期的な企画である。失われた過去を、身近に手繰り寄せることが可能になったのだ。

市町村史や字誌、各種記念誌や自分史などの編集はもろろんのこと、大学などの各種研究機関でも欠かせない。そのことによって沖縄近代史の研究は、さらなる飛躍が期待されよう。

## 資料から「読み物」へ

宮城晴美（沖縄女性史家）

沖縄近代史研究者の誰もが直面する新聞資料との「取っ組み合い」。ハンドカバーで製本された分厚い新聞コピーを図書館等で閲覧する際、マイクロフィルム特有の細かい文字、裏写りで判読の厳しい紙面を目を凝らして追うという、実に根気のいる作業を強いられる。複写しようものなら、これまた体力勝負だ。こうしたハンデは、県内の歴史編纂に女性や生活関連記事のディテールの欠落を招き、権威ある歴史書にさえ、愛国婦人会や国防婦人会の記述に誤りを生じさせる遠因ともなった。



今回、電子版の新聞復刻が刊行されたことにより、鮮明な画像、文字の自在な拡大で「視野」が拡がり、新たな沖縄の女性史・生活史の発掘が可能になってきた。

たとえば、長年の慣習として続いてきた沖縄女性のハジチ（手の甲にほどこした入れ墨）。施術者・業者ともに、今後は刑法を適用して罰するという記事が一八九九（明治三三年）一月二日の『琉球新報』に載るや大騒ぎとなり、乳幼児なら認めてもらえると誤解した女性たちがハジチ業者の元へ駆け込んだそうだが（一月三日）。その後も止むことのないハジチ取り締まりの記事を電子版では容易に見つけることができ、これまで「風俗改良」の一環として注目されてきたハジチが、蚕風の域を超え、当局と対峙してまで「身体表現」の主体性を貫こうとした明治女のすさまじいまでの「生きざま」を垣間見せる。

電子版は、沖縄近代史資料としての新聞を、机上の「読み物」へと変身させたといっても過言ではない。



琉球新報

日刊

成慶

本報二日(水)は... 琉球新報社

御講書始 十二月五日

全大國水産大会 全上

郵便利下問題 全上

議院経費 全上

商法改正案 全上

豫算提出期 全上

日銀の増資 全上

金融状況 全上

第二艦隊續報

検索システムについて

- 1 検索システムインストールCDをパソコンに挿入
2 インストーラー画面の手順に従ってインストールを行う
3 検索画面から発行年月日または号数を入力
4 一覧から閲覧したい紙面を選択し、1クリックで画面を表示(本パンフ3頁参照)

- コピーガードについて
検索システムについて
動作環境
●コンピュータ本体: Pentium4®以上を搭載したパーソナルコンピュータ
●対応OS: 日本語版 Microsoft Windows XP以上
●メモリ: 512MB以上(1GB以上推奨)
●ハードディスク: 600MB以上の空き容量
●モニタ: 1024×768ドット推奨 \*sRGB規格対応モニター推奨
●ドライブ: DVD-ROMドライブ必要

琉球新報検索画面のスクリーンショット。検索条件、該当件数(23145件)、検索結果一覧表、および検索履歴表が表示されている。

宮古嶋大火 金募集
那覇区役所
首里区役所
沖縄新聞社
琉球新報社
生徒募集に就いて
生徒募集に就いて
臨時百里區會
臨時百里區會
臨時百里區會
臨時百里區會
臨時百里區會

関連復刻版

『うるま新報』復刻版全6巻 [1945年~1951年]
『琉球新報』復刻版全27巻 [1951年~1956年]
『沖縄新民報・自由沖縄』復刻版全2巻
『占領期・琉球諸島新聞集成』復刻版全16巻
『沖縄教育』復刻版全36巻・別冊1

琉球新報 日十二月一年三十四治明
舞樂而留國サンバ
竹村殖民商館出張所
新古諸白 賣出シ
上酒賣出シ五十銭
御正月用品山山着荷
味香餅油改良良
其外色々着荷
右様統括種類海産物運
仕候間多少不揃類物買
求取願上様
電話 一五七七
〒一〇〇〇

沖縄砂糖月報
本年内各部とも甘糖は豊作にて新糖の製造も
例年より早く随つて輸出も五万担余に達した
るを以て大坂にては前述の相場如何んを築道
ひ容易に思慮費をなす結果相場は始終終
否みて去る二月五日には二歩半が五銭九厘
七毛二歩か五銭七厘二毛一歩半が五銭九厘
毛なりしも全七日に至りては二歩が五銭六厘
一毛一歩半が五銭六厘に下りたりしや當
地の相場は一々變動を來し二歩が五銭四厘八
九十錢の相場より四角三十錢に暴落するに至
りし農家は於ては賃租公費の滞納頻りに
相促せらるゝを以て已むを得ず捨て買ひを
したるに全十六日に至りて大阪の相場二歩
半が五銭七厘六毛二歩が五銭六厘八毛一歩半
が五銭五厘六毛に與費したれば各商店とも大